

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO.54

2006年5月

Special to the Newsletter

キューバ人=ニグロ=猿=アイリッシュ=「考える人」

武藤 脩 二

本稿を依頼する書簡とともに送られてきた『アメリカス世界のなかの『帝国』』の目次を読んでいるうちに、増崎 恒氏の「スティーヴン・クレインの描くニューヨークとキューバ人―「行われなかった決闘」に見る帝国主義イデオロギー―」に目が留まった。本文（好論）を読むと、クレインの米西戦取材記は当時の人種イメージ、「キューバ人=ニグロ」、「ニグロ=（類人）猿」を反映している、と指摘されている。また増崎さんは、クレインのニューヨーク・スケッチ「行われなかった決闘」でのキューバ人表象にも目をつけて、キューバ人が「黄色っぽい褐色の顔」をした「黒いディゴウ」と形容されている点をとらえて、「このキューバ人を、白人ではなく、「黒人」もしくは人種的にそれに近い人物としてクレインが設定していたことがうかがえる」としている。

ぼくがまず興味を引かれたのは、キューバ人の（行われなかった）決闘の相手というのがパッツィ・タリガンという名前を付けられている点である。筆者は「パッツィについての考察は省」いているのだが、そして口頭発表の折には説明されたに相違ないのだが、この男は間違いなくアイリッシュである。喧嘩好きで殴られ強いところ、威勢がやたらと勇ましく長広舌を振るところなどはまさしくアイリッシュの特性そのものだし、何よりもその名、パッツィ・タリガンがアイリッシュ・ネームなのである。

タリガンもアイリッシュによくある苗字だが、パッツィ（PatseyあるいはPatsy）はアイルランドの守護聖人聖パトリックに由来し、アイリッシュの固有名詞というよりは、代表名詞といえる（女性はブリジッドで聖ブリジッドに由来する）。キューバ人が最後まで「キューバ人と呼ばれている「匿名性」から「キューバ人全体を一般化しようとする作家の意図が見えないだろう」と増崎さんは正確に推測しているのだが、同時にパツ

ツイもアイリッシュを一般化しているように思われる。

このアイリッシュ・ネームが取り分け興味をひくのは、クレインがこのときおそらく初めて意図的にアイリッシュ・ネームを用いたと思われるからである。クレインは『街の女マギー』（私家版、1893年）でニューヨークの貧民街で聞き覚えた言葉を作品に取り込んだのだが、そのときはアイリッシュの言語とは知らなかったらしい（藤井健三元中央大学教授による）。貧民街の住民は酒と暴力に明け暮れていて、いかにもアイリッシュらしいのだが、マギーをはじめとして登場人物はみなアイリッシュとは思えない名前である。「果たされなかった決闘」（1894年）ではパッツィ・タリガンとまさしくアイリッシュの名前を使っている。たぶんこの頃アイリッシュとその生態に目が開かれたのであろう。

最後に警官がキューバ人だけを拘束していくのは、警官が単に〈国家権力〉の手先であるからだけではなく、またキューバ人に「あんたの知ったことではない」と生意気なことをいわれて腹を立てたからだけでもないだろう。むしろ警官もアイリッシュだったからかもしれない。特にニューヨークの警官はアイリッシュが多かった。警官が到着したとき、パッツィは「最後の長広舌」をふるっていたが、その言葉はまさしくアイリッシュ・イングリッシュなのである（キューバ人の英語はところどころ文法違反はあるものの、かなりきちんとしているので学習したのだろう）。警官はパッツィの風体顔付きからばかりでなく、その言葉と喋り方からも仲間のアイリッシュと理解した可能性が強い。だが、これはあくまでも推測。ただ、アイリッシュを補助線にすると色々なことが見えてくるとだけは見える。

そうしたことよりも肝心なのは、繰り返せば、クレインの米西戦争記事は当時の人種イメージ、「キューバ人＝黒人＝ニグロ」、「ニグロ＝（類人）猿」を反映している、と増崎さんが指摘していることである。また増崎さんは、ニューヨークのキューバ人が「黄色っぽい褐色の顔」をした「黒いディゴウ」と形容されていることから「このキューバ人を、白人ではなく、「黒人」もしくは人種的にそれに近い人物としてクレインが設定していたことがうかがえる」としている。この点もアイリッシュと結びつく。

アイリッシュ・アメリカンはアメリカで「ブラック・アイリッシュ」と蔑称されていた。別に彼らが人種的にブラックだったからではない。ブラックなみに扱われたからである。1840年代のアイルランドのポテト飢饉でアメリカに流れ込んできた貧しいカトリックのアイリッシュは黒人と職も住も隣り合わせになることが多かった。1850年以来かなり長い間人口調査でもアイリッシュはムラットウ（白人と黒人の第一代混血児）に組み入れられた。色のヒエラルキーでは白は最優等とされ、黒は最劣等とされていたことの反映である（ムラットウには「黄褐色の」という意味があり、「黄色っぽい褐色の（olive）顔」のキューバ人はムラットウの範疇に入るだろう）。これはアメリカに限った

ことではなく、ヨーロッパでも似たようなもので、アイリッシュはブラック扱いだったのである。

この「ブラック・アイリッシュ」という言葉は、飢饉移民世代の二世であるユージン・オニール、三世であるフィッツジェラルドが強く意識したものである。オニールはこの言葉を正面から受け止めて、そのブラックネスをヨーロッパのブラック・メランコリーの伝統と結合した。『毛猿』では労働者ヤンクをメランコリーの図像に嵌め込んでいる。フィッツジェラルドは気位の高い男だったから、ブラック・アイリッシュの蔑称に激しい劣等感を覚え、可能な限りブラックネスを払拭しようとした。ギャッツビーにはそうした面が透けて見える。

オニールで興味ぶかいのは、たとえば『毛猿』の労働者ヤンクにネアンデルタール人の姿勢をさせたり、ロダンの「考える人」の姿勢をとらせていることである（『楡の木陰の欲望』のエベンもこの姿勢をとる）。ネアンデルタール人の発見は『種の起源』とほぼ同時期だったし、猿と人間を繋ぐリンクとして考えられ、アメリカでもその模型が展示されたりしたから、オニールの想像力を刺激したのであろう。

それよりも興味ぶかいのはロダンの「考える人」へのアレルギーである。あの像はいうまでもなくダンテやデューラーの「メレンコリア」などルネッサンスのメランコリー表象に根ざしているが、ルネッサンス時代と大きく異なるのは現代の「考える人」が労働者や類人猿を思わせる表情や体格をしている点である。オニールはそこに触発されたに違いない。

日本の彫刻家たちもロダンの影響を受けたが、中でも朝倉文夫は「考える人」に触発されて「進化」（1907年）を彫った。猿から人間にいたる進化の心理的過程を表現したものだ。また萩原守衛も同じ影響のもとに「労働者」（1909年）を彫った。日本にもメランコリーの図像学がこのようにロダン経由で、オニールと類縁関係を持って伝播したのである。

増崎さんの米西戦争のエピソードを読んで思い出したことがある。増崎さんによるとキューバ人はアメリカ人によって猿扱いされていたのだが、ロシア皇帝ニコライ二世も日本人のことを憎悪交じりに「猿」と呼んで軽蔑していた。米西戦争で日本人海軍将校がアメリカ軍艦に乗船して観戦していた。秋山真之である。秋山のサンチャゴ湾閉塞作戦についての報告から、旅順港閉塞作戦が行われたことはよく知られている。そして秋山は1905年の日本海海戦の作戦を練り上げ、ロシア皇帝が派遣したバルチック艦隊をほとんど全滅させた。日本とロシアの和平交渉の仲立ちをしたのが、荒馬騎兵隊を率いてキューバでその名を轟かせたセオドア・ロウズヴェルトであった。何だか世紀転換期の世界を巡る猿回しを見ているような思いがするのだが、如何だろう。

（中央大学名誉教授）

文学の中のアメリカ生活誌 (45)

新井正一郎

American Language (アメリカ語) 17世紀のイギリスでは正字法が統一されていなかったため、イギリス領アメリカにたどりついた初期のイギリスの移民団 (ビルグリム・ファーザーズ) の大部分は、勝手に言葉を綴っていた。英語辞書の出発点となった R. Cawdrey の *A Table Alphabeticall* (1604) というものがようやく世に現れた時代であったことを考えれば、それも当然というしかない。2、3の例をあげると “i” と “j” や “w” と “v” は区別されず、joyはioyeと綴られたり whichがvwhichとも書かれていた。また名詞の語尾に-eを時折添えて、たとえばhalf(e)、year(e)という形で用いられることもあった。

英語の綴り字法の確立に大きな役割を果たしたのが、ビルグリム・ファーザーズが到着してから135年後に出版された Samuel Johnson の *Dictionary of the English Language* (『英語辞典』1775) である。彼がロンドンのゴフ・スクウェアの自宅の屋根裏部屋で6人の助手を使って最初の言葉の辞典と呼ばれるこの英語辞典を作り始めた時、英語の正しい用法を広めようという教育的思いを持っていた。その第一歩として彼は英単語の綴り字や語法を定着させたいと考え、例えば musick、publick、logick などでは k を語尾に付加し、hono(u)r や colo(u)r のような綴りの場合は -our 形を採用すべきだと注記した。その結果、イギリス人たちは次第に Johnson が提唱した綴り字法を手本にするようになったが、早い時期にイギリスから遠く離れた新世界に移り住んだ人たちの多くは相変わらず変則的な綴り、発音、文法を使っていた。独立宣言の草案を作成した Thomas Jefferson はよほど妙な綴りが気に入らざしく、彼の文章には independent (独立した) の代わりに independant という形が、payment (支払い) の代わりに paiment が用いられている。そのためか、晩年の Johnson はアメリカ人を Rascals (ならず者)、Robbers (盗賊)、Pirates (海賊) と罵倒し、彼等の言葉を barbarism (野蛮な言葉) と呼んだ。

だからといって、この時代のアメリカの知識人たちが綴りや言葉遣いなどに無頓着でいたというわけでは決してない。1775年5月、フィラデルフィアで開かれた第2回大陸会議に参加した Thomas Jefferson, Benjamin Franklyn, John Adams, John Witherspoon らは、綴りや語法の変則を抑えることや独自の国家にふさわしい標準的な国語を持つ必要を熱心に論じあった。特筆すべきは、独立戦争に参加したことがあるコネティカット州出身の筋金入りの連邦党員 Noah Webster (1758-1843) だ。法律家を目指してイェール大学に入学したが、卒業しても希望する仕事を見つけないことができなかった。それに代わるものとして彼が選んだものが (いや選ばざるをえなかったものが)、ニューヨーク州ゴーシェンにある学校で教鞭をとることであった。実のところ、これが彼の人生に一つの転機を画した。彼は当時学校で使われていた Thomas Dilworth のようなイギリス人が書いた英語教科書は手に入れにくいばかりでなく、お粗末きわまるものであることを痛感した。彼は言語における国民的自覚を促すような教科書を作りたいと考えた。1789年に著した *Dissertation on the English Language* (『英語論』) の中で、彼はこう述べている。「独立国家として、我々の誇りは政府と同じく言語においても独自のシステムを持つことを要求する」。1783年に著した *Grammatical Institute of the English Language* (『英語文法原則』) の第1部の『綴り字教本』、翌年に出版された第2部の文法そして1785年に完成した第3部としての読本も予想以上に反響をよんだ。とくに商業的な成功を収めたのは、発音に従って綴り字を簡単にすることを説いた第1部の『綴り字教本』で、この本は1783年から1883までの100年間に8千万部も出て、*Webster's Speller*

(『ウェブスターの綴り字教本』) とか *Blue-Backed Spelling Book* (『背い背の綴り字本』) とし
て知られた。

経済的余裕ができた彼は、以後系統的な言語や綴りの仕事に打ち込んでいった。前に記したよ
うに、この背後には新しい国づくりはイギリスの言語的支配から抜け出すこと、つまり、「共通
な明確な国語をつくること」にかかっているという信念があったからだ。1806年、Websterは
Johnsonの辞書を批判する形でコンバース社から *A Compendious Dictionary of the English Language*
(『簡約英語辞典』) を出版した。収録語数3万8千400語、定価は1ドル50セントであった。長
い序文に現れているこの辞書の主な編集方針は、当時使われていた American English (「アメリカ
英語」1806年の言葉) の語彙を完全に収録すること、そして発音に従って綴り字を簡単にするこ
とであった。上記の辞書に収められている新語(アメリカ語)の一部を次に記す。Americanism (ア
メリカ語、1781年)、applicant (志願)、appreciate (値上がりする、1778年)、barbecue (パー
ベキュー、1697年)、Congressional (会議の、1775年)、coop (檻)、corn (とうもろこし)、
crib (貯蔵倉庫)、druggist (薬剤師)、land office (国有地管理局、1781年)、land (土地)。彼
はまた、巻末の綴り字改革案のなかで以下の提案をしている。(1) centre (-er) (中心)、fibre (-
er) (繊維)、metre (-er) (メーター)、sceptre (-er) (笏) などでは -re 形でなく -er 形で終える。

(2) Johnsonが critic (批評者)、logic (論理学) などに付加した -k を除去する。(3) favo(u)r (好
意)、humo(u)r (滑稽)、labo(u)r (労働) などでは -or 形にする。(4) checque (抑制)、lacquey
(従僕)、masque (仮面) などは check、lackey、mask と綴る。(5) defence(-se) (防衛)、
licence(-se) (許可証)、offense(-ce) (犯罪) などは -se 形を採用する。

その当時アメリカ独立運動の立て役者でもあり、綴り字改定の必要性を説いていた友人の
Benjamin Franklynはこの綴り字改革に同意した一人であった。ついでにしるすと、従来のアルファ
ベットに6つの新しい文字を加えるだけでなく、黙字はすべて除去する(bread, give, built — bred、
giv, bilt) という Franklyn の改革案はあまりにも極端で、一般には受け入れられなかった。これに対
し、Websterの試みは今日のアメリカ英語に定着している。

1828年、Websterは1806年版を土台に2巻から成る *An American Dictionary of English Language*
(『アメリカ英語辞典』) を出した。アメリカ最初の本格的な辞書といわれるこの本には1806年
版で扱った語彙のほぼ2倍にあたる7万語が収められている。これ以後も彼は修正を施し、改訂版
を次々と刊行した。それらの版は *Webster's Dictionary* (『ウェブスター辞書』、1840年代の言葉)
とか単に *Webster* と呼ばれた。1843年、Websterが亡くなると印刷屋であると同時に出版者でもあ
る Merriam兄弟がその版権を取得、1847年に最初の *Merriam-Webster Dictionary* を出した。改訂者は
Charles A. Goodrichであった。これは爆発的に売れた。その後も改訂がなされ、この辞書は現在
OEDに次ぐ座を占めている。

詩人 Walt Whitman は若い頃にロングアイランドの小学校で教鞭をとったが、綴り字法の時間に
用いたのが前記『ウェブスターの綴り字本』であった。その後ジャーナリズム界に入って活躍す
るが、その頃に書いた記事のなかで、彼は『ウェブスター辞書』を「これまでの辞書のなかで最
も完璧なもの」とまで推賞している。

最後に American language の用例を一つあげておく。The common faults of American language are an
ambition of effect, a want of simplicity and a turgid abuse of terms. — *The American Democrat* (1838)

(天理大学国際文化学部教授)

音声自動翻訳実現への期待

鈴木 弥生

私の勤務している、「ATR音声言語コミュニケーション研究所」は、京都の南部に位置し、京都府相楽郡精華町光台にある「国際電気通信基礎技術研究所(Advanced Telecommunication Research Institute International: 以下ATRと省略) という研究施設に入っている複数ある研究所の一つだ。この辺りは相楽郡南部の山を切り開いてできた地域で、関西に第二の筑波学研都市を作ろうと約20年前に開発され、ATRだけではなく近隣には、けいはんなプラザホテル、NTT、京セラ、島津などの民間企業の研究施設、また平成14年には国会図書館関西館も設立された。建物の周囲は緑や花に囲まれ、広々とした施設内に大きな窓ガラスから日の光が差し込む日などは、季節感たっぷりの環境が楽しむことができる。ここを訪れる人から、「こんな良い環境で研究に勤まられるのは幸運ですねー」と感嘆の息を漏らされることが多い。この研究所で行われている研究は音声翻訳だが、この音声翻訳の研究は前身の研究所をいくつか遡ると、手がけられてからすでに約19年が経っている。この技術の実現に向けて平成13年からスタートした現在の研究所になってからは、大規模コーパスベースでの音声対話翻訳技術(*注1)を用いた研究開発がますますピッチをあげて進んだと言える。

現代社会において異なる言語間でのコミュニケーションを自由に行うことは、経済活動等のグローバル化に伴い、ますます重要になってきており、日常使用される話し言葉を取り扱うことのできる音声翻訳システムの実現に対する要望は内外ともに高まっている。この研究所ではこのような要望を実現するために、さまざまな話題や環境で話された言葉の的確な認識、翻訳を可能にする多言語音声翻訳技術の研究を行っている。研究対象言語は主に日⇄英だが、数年前から日⇄中の研究もスタートし、韓国語、スペイン語、フランス語、インドネシア語などその他の言語にも展開しつつある。

この研究開発を目的として収集された日英100万文、日中50万文の対訳コーパスを用いて開発されたコーパスベース音声翻訳システムにより、日英ではTOEICスコア650点と同等の翻訳性能を達成するに至り、音声翻訳技術は飛躍的に進歩した。昨年度はこのシステムを使って関西空港などで実証実験を行い、利用者からは「ほとんど通じた」というアンケートレベルが50%を超える結果をいただき、好評を得た。

音声自動翻訳のシステムは、①音声を聞き取って(音声認識)、②別の言語に翻訳し(機械翻訳)、③音声にして出力する(音声合成)、という3つの要素技術(サブシステム)から出来ている。これら3つの要素技術は従来からそれぞれ独立した技術として各機関でも研究開発されており、既に音声認識ソフトやWEBページを翻訳するソフトなどは市販されている。ATR音声言語コミュニケーション研究所では、これらの3つの要

素技術の研究開発と共に、それらを統合して一つの音声自動翻訳システムを作る統合のための研究を行っている（実は私自身はこのシステム統合をする、統合システム研究室に所属している）。

先に述べたように、ATRが音声翻訳の研究を開始して約19年になる。音声翻訳技術が夢の技術であった時代から、実用化を目指し、ニーズが明確な旅行対話にフォーカスを変えて行きながら、研究がここまで進んだ。現時点では日常旅行会話に限定すると、1秒程度の遅れで音声翻訳が完了し、その実用性を議論できるレベルまで達した。今後は技術の向上や改良を通じて、ますます実用性を高めていくことになる。実際のサービスに必要な様々な問題点もクリアしていかななくてはならない。たとえば実環境の使用に対応した、雑音抑圧処理の開発、固有名詞の問題、ポータビリティの問題など課題は残されている。そして、翻訳技術においては、何よりも人間の同時通訳者や翻訳者と比較すると、まだ足元にも及ばないのが現実である。これからは、より高度な音声自動翻訳を目指すとともに、この技術を使って、同時通訳者支援ツールとして役立つ・・・など、様々な観点からよりいっそうの期待がかけられている。多くの期待と可能性を持ったこの研究領域で働いていると、他では得られない貴重な経験をすることができる。少なくとも私自身は、英語通訳者としても、英語に関わってきた一人の人間としても、異文化コミュニケーションのツールの一つとして、音声翻訳システム研究開発に関わっていることの幸せと満足感を感じている。

（国際電気通信基礎技術研究所研究員）

（注1）大規模コーパスの音声翻訳技術：人間が翻訳規則を入力するのではなく、コーパスに含まれる大量の対訳文を計算機を用いて自動的に分析し、音声翻訳のための規則を機械学習するアプローチ。

アメリカス学会の創立10周年を記念して 『アメリカス世界のなかの「帝国」』を出版

天理大学アメリカス学会では、昨年11月26日に開催された同学会創立10周年記念年次大会を機に、学会出版の記念単行本として『アメリカス世界のなかの「帝国」』（『アメリカス研究10号』に相当）を天理大学出版部から刊行した。同記念号には、合計18篇の論文が収録されているが、テーマである「アメリカス世界のなかの『帝国』」を扱う第1部には、北中南米のさまざまな視座から計12篇の力作が掲載されており、アメリカ研究や中南米研究関係者の熱い視線を浴びている。

今回の出版は、2000年3月に発刊された『アメリカからアメリカスへ—欧米という発想を超えて—』（創元社）、2003年12月に発刊された『アメリカス学の現在』（行路社）に次いでアメリカス学会編の学術書としては、第3弾にあたる。ご希望の方は、アメリカス学会までメールにてお申し込みください。定価2100円の価格にてお届けします。

旧課程最後の卒業生 3名に

「酒本真理子賞」を授与

天理大学アメリカス学会では、毎年国際文化学部の英米、イスパニア、ブラジルの各学科の最優秀卒業論文執筆者に対して「酒本真理子賞」を授与しているが、昨年度（2005年度）の「酒本真理子賞」授賞式は、去る3月22日卒業式式典直後に開かれた。上記3学科の各学科教員・卒業生が参列した学科別のクラス会席上、以下の受賞者3人にそれぞれ賞状と図書券2万円分の副賞が手渡された。

この「酒本真理子賞」は、1989年度に英米学科を卒業し、1年後に志し半ばにして白血病で亡くなった酒本真理子さんに因んで贈呈されるようになった。彼女の父親の酒本昌彦氏から、「後輩の育成とアメリカス学会の活動に役立ていただきたい」と毎年寄付を頂いているが、その一部を「酒本真理子賞」として活用している。

英米学科：土屋陽子

“A Study of How English Teachers Can Develop Learners' Motivation: Focusing on University Students Majoring in English in Japan”[英語論文]

（「英語教員はいかに学習者のモチベーションを高めることができるか—日本で英語を専攻する大学生を中心に—」）

イスパニア学科：谷 英理

「『無垢なエレンディラと無常な祖母の信じがたい悲慘の物語』における風の効果とその役割」

ブラジル学科：山本利彦

「彷徨う「ブラジル文化」—グラウベル・ローシャの映画を通して—」

新入会員（敬称略）

及川正博（11月）、植村史子（1月）、林美智代（4月）、高橋美帆（4月）、山本真司（4月）

編集後記

◇天理大学アメリカス学会では、去る1月30日に学会創立10周年を記念して、メキシコ国立自治大学文献研究所マヤ研究センターの大越翼博士をお招きして「植民地時代のマヤ人の間における〈合意〉のありかた—空間、地図、テキスト—」の演題で講演会を開催した。中南米研究者の他に学生も多数参加し、熱心に聞き入っていた。

◇天理大学アメリカス学会の2006年会計年度は、昨年11月26日の年次大会開催日にスタートしました。2006年度の年会費（一般会員：5,000円、賛助会員：1口30,000円）を未納の会員の皆様は、至急、郵便振込取扱票にて指定口座（下記参照）宛にお振り込みくださいますよう、よろしくお願い致します。

(TK)

当学会の年会費は、一般会員5,000円です（入会金はありません）。納入は、郵便局で下記の口座にお振り込みくださいますようお願い致します。

口座番号：00900-5-70364

加入者名：天理大学アメリカス学会

なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集しております。賛助会員の会費は年1口30,000円です。

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお寄せください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター
(No. 54 : 2006年5月1日発行)

編集人：新井正一郎

〒632-8510 天理市柚之内町1050

天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax：0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/